「RFナイフを使用した獣医科基本テクニック」を監修して

医療機器はそれぞれのメリットデメリットがあるので、そこをよく理解して使うのが大切です。
私も10数年前からRFナイフを使用しておりますが、多くの腫瘍外科手術の時にはRFナイフを中心に使っています。電気メスでは皮膚を切ったときは表層の炭化した皮膚を切らないと形成できないが、エルマンはその必要がありません。電気メスの炭化をそのままにしておくと瘢痕のようになり、それが後に合併症になる可能性もあります。SSI（手術部位感染）の可能性があるので皮膚はきれいに切る方が良いし、きれいに形成できることでイメージ通りの手術を行うことができます。SSI以外にも皮膚自体が瘢痕してちょっとした肉芽っぽくなってくることがあります。動物なのでそういった美容的なものは関係ないという意見もありますが、傷口をきれいにすることで飼い主さんが見えるのはそこしかないので、手術の評価、そして病院の評価につながります。私は腫瘍外科医で腫瘍外科の分野でいろんな手術を数多く執刀してきましたが、腫瘍側からの出血が嫌で、それは細胞が一個でも混じっているかもしれないからです。出血は極力避けたいので金属製のメスは止め始めています。気持ちとしては一滴でも出血させたくなく、無血で終わりたいというそういう意味ではRFナイフは必要と考えています。さらにRFの特性以外にも、RFナイフに接続して使用する有用なデバイスもありますので、その使用例を中心にご紹介致します。
本書はRFナイフを使用するにあたり、診療の一助となるテキストとしてご利用いただけると幸いです。

生川　幹洋　先生
なるかわ　みきひろ

【出身大学】
日本大学生物資源科学部獣医学科卒業

【出身地】
三重県四日市市

【資格】
獣医師（外科　腫瘍）
獣医腫瘍科認定医Ⅰ種